
月光

ゆんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光

【Nコード】

N32690

【作者名】

ゆんた

【あらすじ】

街の中心部から少し外れたところに、小さなビルがポツンと建っている。そこは一人の魔術師の事務所になっていた。黒いスーツをパリッと着て、黒縁メガネを掛けている。真面目そうな人柄を演出しつつ、その雰囲気は不気味で得体が知れない、そんな男だった。そんな不気味で得体の知れない彼にも、たった一人だけ同業者、もとい手伝いの少女が居る。彼女はいわゆる魔法使いの弟子であった。とは言え、そんなものは肩書きで、彼女の仕事は毎日彼のコーヒーを淹れることくらいだった。そう、そんな男と少女、それと一人の

エキストラ。少し歪で擦れ合い、どこか飄々とした、三人の些細で微細な物語。

青山蘇鉄の事務所は、いつもコーヒーとタバコの匂いが充満している。

窓際に事務用デスクが置かれ、中央にはガラステーブルと年季の入ったソファがある。事務所の壁側にはちらほらと食器棚やコーヒーマシンが置かれていて、常にコーヒーの香ばしい香りを発している。以上が青山蘇鉄の事務所の全容だった。あやまそつ

狭い事務所の中には、二人の影がある。一人は成人男性、もう一人は制服を着た少女のものだ。

事務用デスクの回転イスにはその内の一人、黒いスーツを完璧に着こなした男　青山蘇鉄が座っている。短めの髪に黒縁メガネを掛け、その表情は真顔なのに笑っているようにも見えた。蘇鉄はデスクの上で数枚のプリントを整理していたが、不意に手を止めてソファに座る少女に話しかけた。

「今月に入って、変死体で発見されたのが四件」

「はい？」

紺色の制服を着た少女　立花睡蓮たちばなすいれんは、どこか間の抜けた声で聞き返した。うつすらと茶色が掛かった肩口までのショートヘアーに、少し鋭い目付きが印象的だった。そしてその双眸は、いぶかしむように蘇鉄に向けられている。

「今月に入ってから犠牲者の数だよ。君も知っているだろう。この街で起きている連続猟奇殺人事件だよ。曰く現代に蘇りしジャック・ザ・リッパー」

「……はあ、まあ殺人事件が起こってるのは知ってますけど。そのせいで今日は学校が休みだったわけですし」

「そうか、せっかく休んでいるところを悪いが、働いてくれないか」
少しも悪いと思ってないような蘇鉄の口調に、睡蓮は「ああ、いつものことか」と思いながら言った。

「お断りします。何で私がそんなヤバそうな話に首を突っ込まなきゃならないんですか」

「引き受けてくれるか。そうか、悪いね。本当は僕が出ればいいんだけど、僕はこれから京都に行かなくちゃならないんだ」

「そんなことは聞いてません。……って京都？ 八橋でも食べに行くんですか？」

魔術師という職業柄、蘇鉄が突然出かけるというのは珍しくは無い。しかし、そういう時は事前に睡蓮に一言断っているのが常だった。

「八橋はお土産にするつもりだよ。ニツキが付いているのといないの、どっちがいい？」

「……なら付いているほうで、ってそうじゃなくて、何でこのタイミングで京都なんですか？」

睡蓮の問いに、蘇鉄は大げさに肩を竦めた。

「協会の招集だよ。末端とは言え、僕も協会の構成員だからね。街を一つ任されている以上、こうした集会には参加しておかないと後々面倒なんだ」

「で、その代償が私に降りかかってきているって訳ですね」

睡蓮が思いつきり皮肉気に言っていると、蘇鉄は珍しく苦笑いを浮かべた。黒縁メガネの奥の瞳が、困ったように細められる。

「だから謝っているだろう。……仕方ないな、君には八橋を二箱買ってこよう」

「それで手打ちだ、みたいに言わないで下さい。うら若き女子高生を殺人鬼の調査に駆り出させようなんて何考えてるんですか」

そう睡蓮が言くと、蘇鉄は軽い口調で返す。

「魔術師にとって年齢なんて瑣末なものだよ。僕の知人に、見た目は二十前半の美しい女性だが実年齢は二百を超えている、なんて魔女も居るくらいだから」

「そんなバケモノと一緒にしないでくださいよ。私は偽り無き十七の乙女です」

「うん、人生において最もフレッシュな時代だね。いいな、僕にも高校生の頃があった」

蘇鉄はどこか遠い目をした。睡蓮は目の前の男の高校時代が全く想像できなかった。

「蘇鉄さんこそ、実は二百歳でした、とか言うんじゃないんですか？」

「僕は生物を専門としていないからね、そこまで大幅な年齢詐称は無理だよ。まあ、ちょっと肌の張りを戻すくらいならできるかもしれないけれど。やってみる？」

ただし痛いけどね、と蘇鉄は笑った。

「結構です。……でも、場合によっては私が三十路を迎えたときに使ってもらいかもれません」

「おや、そんなことをしたら君も魔女の仲間入りだよ」

「いいじゃないですか。誰かに毒リンゴを食べさせよう、とか言ってるわけじゃないんですから。……って、何で鞆を持って立ち上がってるんですか」

話しているうちにいつの間にか蘇鉄は旅装を調べたらしく、大きなビジネスバッグを持って立ち上がっていた。

「言っただろう。僕はこれから京都に観光　もとい召集に応じるって」

「今すぐ出かけるなんて聞いてません。そして何ですか、その私に渡そうとしている書類の数々は」

蘇鉄は睡蓮の抗議に対して曖昧な笑みを浮かべ、困惑する睡蓮に分厚いプリントの束を押し付けた。

「件のリップパーのプロフィールだよ。まあ、大したことは書いていないけれど」

「警察から勝手に持ち出してるのに酷い言いようですね」

蘇鉄は睡蓮の言葉にわざとらしく驚いて、笑ったままの表情で白々しく返す。

「人聞きが悪いなあ。僕はただ警察の人と仲良くしているだけだよ。」

……じゃあ、僕はこれで」

「蘇鉄さん」

スーツ姿の背中に、どこか悲壮感を漂わせた声が掛けられた。

「……何だい？」

仕方なく蘇鉄が足を止めると、睡蓮は射抜くような目で蘇鉄を睨んで言った。

「八橋、ちゃんと二箱買ってきて下さいね」

それを聞いて気の抜けたように蘇鉄は笑った。

「もちろんだよ。願わくば、それが仏壇へのお供え物にならないことを」

「……そう思うなら自分で行って下さい」

ボタン、と扉が閉められる。

人が居なくなるという静寂。事務所の中は無音になる。そこへ響く小さな車の走行音が、僅かばかりのバックミュージックとなっていた。

佇む睡蓮は、その手に持った分厚い書類を見て、憎々しげに舌打ちをした。そしてそれを中央のガラステーブルに叩きつけるように置く。

睡蓮はスカートのポケットから煙草を取り出して、ライターで火をつけた。煙を深く吸い込んで、大きく吐き出す。痺れるようにニコチンが全身に広がっていくのを感じながら、睡蓮はソファーにどっかりと座り込んだ。

立ち昇る煙は窓からの太陽光を浮き上がらせる。埃っぽく、さらに煙が充満した部屋に、光の帯が斜めに走る。ソファーから舞い上がった埃も、光に照らされるとダイヤモンドのようにキラキラと輝いた。

睡蓮は見下すようにして、ガラステーブルの上に置いた書類を見る。この事件の容疑者である男の白黒写真に、外見や身長などが簡条書きで書かれている。

それは見覚えのある、男というよりは少年といった風貌の人間だ

った。

睡蓮はその書類の上に灰皿を置き、それに啜っていたタバコを押し付けた。皺くちやになった書類には目もくれず、睡蓮はぼんやりと天井を見上げる。

「……全く、休む暇もありやしない」

睡蓮は自分の年寄りっぽい口調に苦笑して、ヤニで黄色くなった天井を見続ける。

「……願わくば、友達になれることを祈って」

睡蓮はそう言って、テーブルの上に詰まれた書類を蹴飛ばした。

*

睡蓮は一通のメールを送って、事務所を後にした。

既に日が沈もうとしていた。街並みは殴りつけるかのような赤色で染められている。真横から照りつける夕焼けに、睡蓮は僅かに目を細めた。

事務所は街の中心部から少し外れたところにあった。中心部に比べると人通りは随分と少ない。この事務所のある区画は、年月を重ねるうちに中心部から溢れていった区画であった。

駅前から一本の道のようになっている中心部は、近くに駅があるということもあり、常に大勢の人々が行きかっている。その人の海は事務所からもそれほど距離は無く、数分歩けば人が押し寄せてくるそこへ足を踏み入れることができた。

そこで一瞬、睡蓮は目が眩んだように立ち竦む。

ただ立っていることさえ難しい人の波、建物の外であるというのに詰め込まれるような圧迫感、そして人々が織り成す雑踏。睡蓮は

それから目と耳を塞ぐように、カバンからウォークマンを取り出してイヤフォンを耳に付けた。

睡蓮が好んで聞くのは洋楽だ。今はロック調の曲が絶え間なく掛かっている。流れるような異国の言葉を耳に、睡蓮は俯きながら駅を目指す。程なくして中央通を抜け、公園のような広場に出た。駅前の広場だ。普段は登校するときに利用しているので面白みはないが、今に限っては夕焼けが彩りを与え、まるで知らない場所のようにも見えた。

駅に入り、横道から地下鉄のホームへと向かう。最初は入り組んだ迷路のように思えたこの場所も、今では考え事をしながらでも足が勝手に動くようになった。登校初日、溢れる人の波に飲まれて遅刻をしたことは、睡蓮の記憶でまだ色褪せないで残っている。

睡蓮は売り場で切符を買い、ホームで地下鉄を待つ。数秒としないうちに地下鉄が到着し、睡蓮は人に飲まれるようにして地下鉄に押し込められた。夕方だというのにこれほど人が居るといのは、さすが都会と言ったところなのか。

不快指数が急上昇していく中で二駅分を耐え凌ぎ、目的の駅に付くと走るようにして地下鉄を後にする。僅かに乱れた髪を押さえて、睡蓮は思いつきり不快気な表情を浮かべた。

地下鉄の駅を出れば、目的地まではエレベーター一本だ。移動時間にして三十分程度なのだが、睡蓮にしてみれば一日分のエネルギーを使い果たすほどの重労働だった。

「……やっぱり、人ごみは好きじゃない」

耐え切れず呟いた言葉は、行きかう人々のざわめきで掻き消された。

駅はデパートに直結しているので、睡蓮は大した苦勞をすること無くエレベーターに乗ることができた。しかしエレベーターでもやつぱり詰め込まれるような人ごみで、睡蓮は何度目か分からない深い溜息をついた。

チン、という音と共に扉が開く。睡蓮が降りた階は、ファミレス

などが立ち並ぶ外食通りだった。

その一角にある、比較的大きめなレストランの前で足を止めた。示し合わせたように反対側から来た少年が、睡蓮の横で足を止めた。

「お二人様でよろしいですか？」

「はい、構いません」

二人はそのまま顔も合わせずに店内へと向かい、ウェイトレスの事務的な質問に、寸分のズレも無く返答した。

＊

スツと伸びた、金属を思わせる立ち姿。制服は校則を遵守しているのに、髪を金色に染めているから風紀委員に目を付けられている。睡蓮に言わせれば素行が良いのだから悪いのだから分からない青年といったところだろう。

きりさきがくま
霧崎楽間。

睡蓮と楽間は窓際のテーブルへと案内された。その間は終始無言で、それでいて気まずさの無い奇妙な空気が出来上がっていた。ウェイトレスはその空気を知ってか知らずか、あくまで事務的な対応で立ち去った。

無言のまま二人はメニューをさっと眺め、適当な注文をしてから十五分が経った。ようやく並び始めた料理を前にして、楽間はコーヒーを啜りながらどうでもいいような口調で言った。

「やっぱコーヒーだろ」

睡蓮は僅かに眉をひそめた。

「……馬鹿じゃない？ ファミレスでコーヒーとか、水に香りを付

けただけみたいな代物でしょ」

「分かってねえな。この安っぱさを楽しめるようにならないと」

缶コーヒーとか最高だな、と楽間は言った。

「それならまだアイスコーヒーの方がいくらかマシ。ファミレスのホットコーヒーなんて、多分インスタントの方がまだ美味しいよ」

「例えそうだとしても、俺は高校生にもなってオレンジジュースを頼むような人間にはなりたくないな」

楽間の声に睡蓮は目を細めた。

「……そんな人の勝手でしょ。ジュースが駄目ならコーラだって飲めないことになるよ」

「炭酸は別物だろ。アメリカから伝わってきた伝統飲料だ」

「え、コーラってアメリカ産なの？」

「さあ知らね。ただ、コーラって言ったらアメリカのイメージじゃね？ あの赤いパッケージとかが特に」

ロゴだって英語だしな、と楽間は言った。

「それは偏見でしょ。ロゴだってアメリカに恋してる日本だけだろうし。私にしてみれば、アメリカは赤って言うよりもストライプとか星のイメージの方が強いよ」

楽間は鼻で笑ってから言った。

「どっちにしる国旗から影響を受けてるってことは変わらないけどな」

楽間は目の前に置かれたサーロインステーキに齧り付いた。早めの夕食ということなのだろうが、睡蓮はこの時間帯に油物を食べる気にはなれなかった。

なので睡蓮の前に置かれているのは、本来デザートとして食べるパフェの類だった。睡蓮は懐具合を心配して最も安いものを注文したが、値段の上下で変わるものといったら果物の種類くらいしか無い。山盛りになった生クリームを崩すように、睡蓮は慎重な解体作業を続けていた。

それを見ていた楽間が唐突に言った。

「それ美味そう。一口くれ」

睡蓮はパフェから目を離さずに返す。

「別にいいけど等価交換。私の要求を吞んでくれたら構わないよ」

「はぁん、まあ内容次第だな」

「降伏してくれない？」

ピタリ、と二人の動きが止まる。

一瞬にして空気が氷のように固まった。

「それは無理だな」

「どうして？ 別に捕まえて欲しいって訳じゃないんでしょ？」

「なんで俺が捕まる前提なんだよ。まあ、もちろんそういう訳じゃないし、何より俺は捕まらないし、捕まる気がしない」

ギラギラした光を放ちながら、楽間は楽しむように言った。

「凄い自身だね」

「まあな、こういう展開も一度や二度じゃないし」

一度や二度と言うが、実年齢は睡蓮と変わらない以上、一体どんな環境で暮らしてきたのだろうか、と睡蓮は柄にも無く興味を持った。

「言っておくけど、私は十秒と掛からずにアンタを戦闘不能にする自身がある」

「へえ、奇遇だな。俺は五秒と掛からずにお前を戦闘不能にする自身がある」

「……試してみる？」

空気が収縮するような圧迫感。一メートルほどの間隔を置いて、二人の間に死線が飛び交う。

「それでもいいが、ここには民間人もいっぱい居るぜ？ お前が一体どういう立場の人間なのかは知らないが、あんま目立つたら不味いんだろ？」

「……」

「沈黙は肯定。ま、仲良くしようや」楽間は背もたれにどっかりと寄り掛かった。「せっかく飯食ってんだから。食事は楽しくって、

昔誰かに言われただろ？」

「さあ、そんな記憶は無いけれど。でもイライラすると消化に悪いらしいから」

「ああ、それがいい」

そう言つて再び肉を頬張り始める楽間。それを見て、睡蓮の口を質問が突いて出た。

「……て言うか、アンタよく肉なんて食べられるね」

「なんでさ？」

楽間は心底不思議そうな様子だった。

「肉を解体した後で、よく肉を食べられるねって言ってるの」

「ああ、そういうこと。……でもその感覚は俺には分かんねえな。

お前だつて魚を解体して身を食べるわけだろ？ それと似たようなもんさ」

「……そういうものなんだ」

「そういうもののなの。俺から言わせりゃ、肉屋とかで働いてる人間とかの方がよっぽど不気味だがね」

確かにそういう考え方もあるか、と睡蓮は妙に納得した。少なくとも睡蓮には、肉を解体したその直後にその美味しさを語る気にはなれないだろう。

それから数分の間、再び無言が続いた。楽間がフォークとナイフを置いたのと、睡蓮がスプーンを置いたのは同時だった。

「……ふう、ごちそうさん」

「今日は私が支払うよ」

「そんな訳に行くか。俺にも僅かながらにプライドがある」

睡蓮の目の前から伝票を掠め取るようにして、楽間はずっと力ウンターへと向かつてしまった。仕方が無いので睡蓮は店から出ることにする。

夕食時になったと言うこともあり、店外にはさらに人が増えていた。睡蓮は同じ空気を吸うのも嫌と言うかのように顔をしかめ、手近にあったベンチに座った。程なくして楽間が店から出てきて、睡

蓮の横に腰掛けた。

これまでとは違う、冷たい圧力を持っていた。

「で、待ち合わせはどこだ？」

背骨に氷柱を捻じ込まれるような声色。

「深夜零時、中央区駅前公園」

その声に、睡蓮は一切の起伏が無い平坦な声で返す。

「おいおい、人の山だぜ、その時間帯」

「大丈夫。私はそういう山の処理が専門だから」

「ふうん……？ まあ、お前が言うならそうしよう」

魔術師の弟子だから、とは言わなかったが、楽間は不思議そうな顔をただで特に突っ込まなかった。

「……逃げないの？」

ポツリ、と呟くような、本来不要な疑問。

「逃げる？ それこそ意味が分かんねえな。ま、俺の目的に則してるんだよ。それ以前に、逃げるなんてのは俺の矜持に反するもんで」
対する楽間の答えはあっさりしたものだった。粘着質な、恨みからの殺人とは違う。無駄な肉をそぎ落とされた殺意がそこにはあった。

「……そう、死んでも恨まないでね」

「そりゃこっちの台詞だ。……ったく、女子高生を相手にするのは初めてだぜ。そもそも真正面から果し合いの真似事をするのが、人生初かもな」

睡蓮は返事をせず立ち上がった。楽間は座ったままだった。

一切の邪気無く笑う楽間から視線を切って、睡蓮は歩き出した。それから少し迷って、昔馴染みの友人にするように、片手を挙げて遠ざかっていった。

思えば、深夜に友人と遊ぶのは、今日が初めてのことだった。

燃えるような夕日も沈み、辺りには夜の帳が下りている。

晴れていた昼間を裏切るように、深夜零時の夜空は今にも雨が降り出しそうに暗く沈んでいた。星の光も月の光も分厚い灰色の雲に遮られて、辺りには人口の光しか存在していない。

睡蓮が佇む駅前の広場　石造りの床に数箇所の噴水が設置され、三百メートル四方はあるだろう広い敷地には、今は睡蓮以外誰も居なかった。

広場はまるで無人の荒野のようだった。駅には明かりが点り、一本向こうの通りにはひっきりなしに車が通っているというのに、この広場だけが現実から切り離されてしまったような、そんな感覚。薄暗い深海に一人で立つてるみたいだ、と睡蓮が柄にも無い思考を走らせたところで、楽間が悠々と歩いてきた。

人気のあるところから無いところへ。海面から深海へと進んでくるように。

文字通り人っ子一人居ない状態の広場に、楽間は少し驚いたような表情を浮かべたが、すぐにスイッチを切り替えるかのようにヘラヘラした笑みを浮かべた。

「早いじゃん」

「アンタが遅い、楽間」

楽間は歩いてきて、睡蓮の前方約十メートルの地点で足を止めた。相変わらずの、学校でもないのに制服を完璧に着て、それでいて髪型はツンツンした金髪だった。

険のある睡蓮の視線に、楽間はホールドアップされたように両手を空に向けた。

「そんなこと言うなって。こっちは一晩中フラフラしてたんだから、正確な時間なんて分かんないんだよ」

「ケータイ持つてるでしょ」

「手厳しい」

面白そうに笑う楽間を、睡蓮は油断無く見つめる。 昼間には無かった血の匂いが、楽間にこびり付いていたからだ。

睡蓮の内心を知ってか知らずか、楽間はどこか間の抜けた声色で話しかける。

「それで、どうしてこの辺には人氣が無いんだ？ だって駅前だぜ？ いくら深夜って言ったって、無人ってのはどうよ」

「あんたが解体作業に勤しんでる間、私は一生懸命人払いをしてたつてだけの話だよ」

魔術という名の、世界に干渉する法則。

魔法使いの弟子である彼女の異能であり、それは同時に彼女の古傷でもあった。

楽間は解体という単語にピクリと肩を震わせたが、反応はそれだけだった。

「……はあん、まあ人に言えないことがあるのはお互い様か」

「そういうこと。……もう一度言うけど、降伏して従って」

「もう一度言う、お断りだ」

同じ調子で二人は言った。二人の間にあった空気が、急激に温度を失っていく。

「……あっそ、交渉決裂ね。私の師匠からは事件の解決を命じられているけど、その手段までは指定されていないの」

「ふうん……それで？」

ヘラヘラ笑ったままの楽間に対して、能面を被ったかのように睡蓮は無表情だった。

「皆まで言う必要は無いでしょ。実力行使、ただそれだけの話」
それは明確な敵対意思だった。

それを受けて、楽間の表情から感情が消えた。

「あっそ」

一息。

掻き消えるかのような速度で楽間は駆けた。睡蓮の呼吸の僅かな間に、楽間は睡蓮と鼻を突き合わせるほどの距離に肉薄していた。それは一体どういう体術なのか。

二人の間にあった十メートルの距離を、瞬きの間に零にしたそれは。

睡蓮が見たときには、楽間は既に刃渡り三十センチ強のダガーナイフを振り被っていた。銀色に照り返す刀身を視認する間も無く、それが銀線となって睡蓮の首を襲った。

その間僅かコンマ数秒。

人間としての最速を極めただろう殺人技術。

それを睡蓮は首を捻って避け、力が僅かに抜けた胴へと流れるような回し蹴りを放った。

表情を驚きと嬉しさで彩った楽間は、ナイフを持っていないほうの手でその足を裁く。まるで予知していたかのような無駄の無い動き。

二人はほんの数瞬制止して、お互いに後ろへ飛んだ。

二人の瞳の色は、動き始める前とは違う高揚を反映しているように見えた。

「……はっ、悪い、お前のこと舐めてたわ。五秒で解体は無理だった」

「それはこっちの台詞。何それ？ 人間が一步で十メートル詰めるもんじゃないよ。それはもっと人間卒業した存在がやること」

超技を披露した後とは思えないほどの平坦さで、二人は会話を続ける。

「何だ、まるで人間辞めた奴を知ってます、ってな口ぶりだな」

へへ、と楽間はくもぐったように笑い、手に持ったナイフを逆手に持ち直した。

「……いいぜ、俺は今からお前を殺す。宣言する。俺の矜持に賭けて、お前は六人目の解体被害者だ」

「六人？ 何、私に会うまでもう一人　　っ」

その刹那、会話を遮るような形で楽間が詰め寄ってきた。

その凶刃を睡蓮はギリギリのところで回避する。先ほどよりも余裕の無い回避行動。

理由は単純だ。一度目よりも二度目の方が楽間の速度が上がっていた。ただそれだけ。しかし、その事実を疑うように、睡蓮は飛び退くように楽間との距離を開けた。

そんな睡蓮の様子を見て、楽間は狂気を孕んだ笑みを浮かべる。

「何そんなに驚いてんだよ。一般人だと思って油断してたか？」

楽間は手に持ったダガーナイフにチラリと目を落とし、血が付いていないことに残念そうな表情を浮かべた。

「お前が今相対してるのは、殺人の鬼なんだ。人間の常識で掛かったら瞬きしてる間にバラバラだぜ」

それは純粹な殺意だった。

余分なものを一切含まない、純度百パーセントの氷のような殺意。それを受けて、睡蓮の目が僅かに細まった。

「……そう、なら私もそれ相応の態度を取らせてもらうよ」

睡蓮は手をゆっくりと上げる。ザワザワと空気が鳴いて、得体の知れない感覚が場を支配する。睡蓮の動作自体は何気ないものだったが、楽間は強烈な圧迫感を感じた。

楽間は全身に意識を張り巡らせる。どんな攻撃であろうと即座に反撃できるように、楽間は重心を落として肉食獣のように構える。

しかし、そんな彼を襲ったのは、目に見えない衝撃だった。

「がっ
ー」

ドズン、と鈍い音が楽間の腹部から響く。収束された空気の塊が、彼の腹部を抉るように射出された。

楽間は何が起こったか分からず、吹き飛びながら自分の腹部を見る。制服のボタンが半数以上吹き飛んでいた。楽間がそれに気付くと同時に、蠢くような内臓の痛みが彼を襲う。

真横に吹き飛びながら、体制を整えようとすると、真横に無表情な睡蓮の顔があった。

「まだだよ」

一撃。素手でナイフを持った方の腕を殴られる。何の変哲も無い打撃の筈なのに、砲丸を真横から食らったような衝撃が楽間を襲った。

それを完全に知覚する前に、次の一撃が加えられる。今度は反対側からだ。殴られながら楽間は思考する。人間に有り得るのか。両側からほぼ同時に打撃を加える、そんなことが。

おおよそ十発程度の打撃を受け、楽間は地面に叩きつけられた。ギリギリのところで受身を取ったが不完全だったらしく、楽間の全身に痺れるような痛みが広がった。

「っ、はっ　は、んだそりゃ、目で追えないんですけど？」

楽間の呼吸は荒く、立ち上がるうとした足元は覚束ない。

それを見た睡蓮の瞳は、やはり変化の無い無表情のままだった。

「アンタが遅いだけでしょ。自称人殺しの鬼」

「ひっで、まるで小物扱いじゃん」

「ほら、今ならまだ許してあげるから、とっとと降伏して私に従いなさい。警察に突き出したりはしないから」

ほんの少しの同情心が浮かび上がってくるのを自覚しながら、睡蓮は楽間に選択肢を与えた。

しかし、楽間の返答は呟くような声だった。

「……それじゃ、駄目なんだよ」

「え？」

「俺の殺人は代償行為なんだ。そんな簡単に止めたくないし、止められないんだよ」

ゆらり、と楽間は睡蓮を見る。その様はまるで幽鬼のようだった。「それってど　」

一閃。声を遮るようにして、楽間のナイフが翻る。睡蓮は危ういところで体を逸らしその凶刃を避ける。彼女の目の前で銀色の残光が夜闇に溶けて消えた。

「お前に俺を理解してもらうつもりはないし、ましてや同情なんて

有り得ない。鬼の思考を人間が理解できる筈も無い。いいからお前はそこで沈んでろ」

再びナイフ、と思わせておいて、楽間はしなせした足で高速の蹴りを放った。予想とは違う攻撃に睡蓮はガードが遅れ、直撃は避けたものの派手に吹き飛んだ。

「っ、それこそ断り。理解の放棄は人間の放棄と同義だよ」

「だとしても、お前にそこまで付きまとわれる理由にはならない。はつきり言って 迷惑なんだよ」

ヘラヘラした笑いも浮かべず、無表情でありながら幾らかの哀しみのような感情を乗せて、楽間は掠れた声で言った。

「……」

「人の世界に踏み込むな。今まで一度も話したことの無い人間が、俺の世界に踏み込むな。なまじ力があるから勘違いしてるのかもしれないが、お前には人を変える力も、人を支える力も無い」

淡々と語る楽間の口調は、まるで自分に言い聞かせているかのようだった。

「誰だってそうだ。誰かを支えているつもりは奴は、その対象に支えられてるのが常だ。教師も言うだろ。私は生徒に何々を教わりました、ってな。そういうことなんだよ。教えることと教われること、救うことと救われることは表裏一体で紙一重なんだよ」

押し付けがましいと、楽間は言った。

それに対して理由の無い反発心が睡蓮の中に生まれた。

「……だったら何、アンタは誰にも理解されないまま、のうのうと生き延びて、これから先も無差別殺人を続けるって言うの？」

「世間的にはそういうことだ。俺の中での殺人の役割は、世間一般のそれとは違うだろうがな」

淡々と、そこに何の意味も見出せないような口調で楽間は断言した。

睡蓮は一瞬言葉を失い、それから搾り出すような声で言った。

「……何て、勝手」

「好きに言え。どうせこうしないと、呼吸すら間々ならない有様なんだ」

「なら私は？」

睡蓮の瞳に 戦闘が始まってから何も映していなかった無機質な瞳に、僅かながらの揺らぎが生まれた。それを見た楽間は一瞬言葉に詰まる。

「……どういう意味だ」

「魔女の私は、一体どうすれば良いの？」

「……」

魔女、その単語の意味は分からなかったが、迫るような睡蓮の口調に楽間は口をつぐむ。

「人と関わる勇氣も無く、人を殺す勇氣も無く、中途半端なまま心臓の鼓動を止めない私は？ アンタが死ねと言うなら死んでやりたかった。……けど」

睡蓮の脳裏を過ぎるのは、もう褪せて見えなくなりそうなのに、尚も彼女を苛む呪いのような記憶。

それを飲み込んで、封じ込めて、睡蓮は楽間に向けて再び手を見る。

スツと滑らかな動作で持ち上げられた掌は、その記憶に対する明確な拒絶の意思にも見えた。

「少なくとも今の私には、待つてくれる人が居るから。埃っぽい事務所で、ぼんやりしているようで腹黒い、そんな人が居るから」
だから死んでやれない、と睡蓮は言った。

支離滅裂な睡蓮の言動に楽間は虚を突かれたように言葉を失っていたが、そのまま半笑いのような表情を浮かべた。

「あつそ、とことん俺とは間逆を行く奴だな」

「……私はアンタに、一緒に来てもらうつもりだった」

呟いた睡蓮の言葉に、楽間は今度こそ体の動きを止める。

「……言葉の意味が分からないが」

「言葉通りの意味。私はアンタを連行して、蘇鉄さん 私の師匠

に保護してもらうつもりだった」

「はっ」

それは軽蔑するような、心底面白くなさそうな笑いだった。

「何だそれ。さっき言っただろ。理解は勿論、同情なんて論外だつてな」

「残念だけど、これは私の中での決定事項だから。アンタの意見なんて聞いてない。そこにあるのは結果だけ。過程なんてあつてないようなもの」

睡蓮はどこか必死だった。しかし楽間にはその理由は分からない。

「……訳分かんねえ、しつこい女」

しかし、楽間は気が抜けたように構えを解いて、殺気を僅かに緩めた。

何か伝わるものがあつたのか、苦笑いをしたままで。

「……ならこうしようぜ。俺はこれから全身全霊を持って一撃でお前を殺そうとするから、お前は一撃で俺を行動不能にすればいい。ああ、勿論殺してくれても構わない。ま、それができるなら、ただ」

楽間は掌でナイフを器用に回した。

「ただし、重ねて言うが一撃だけだ。殺すにしろ行動不能にさせるにしろ、一撃。少なくとも俺は一回しかナイフを振らない。もし、お前が一手で俺を行動不能にさせることができたなら、……いいよ、お前を認めて従おう。それこそ、殺人よりも面白そうだ」

「二言は認めないよ」

霧散していた空気が再び引き締まる。ザワザワと空気が波打つ感触が、再び辺りを支配する。

「いいぜ、そもそも前言撤回は趣味じゃねえ」

二人は視線を交差させる。その距離は、最初と同じく十メートルほどになっていた。

無音 それを払うように、同時に二人は動いた。

瞬きをするよりも短い間、楽間のナイフが微細に動く。それだけ

で無数の死線が生まれ、その軌跡を睡蓮は冷静に分析し、あわせるようにカウンターを頭の中でシミュレートする。

殺すか、倒すか。

それだけの違いが先攻と後攻を決めた。楽間は後手に回った睡蓮をあざ笑うかのように　全く予備動作の無い状態からナイフを斜め下から一閃した。

それはまるで、頭部を顎から寸断させる死神の鎌だった。

楽間は勝利を確信していた。極限の集中力が可能にする遅滞した世界の中で、一瞬後に脳漿を散らして死ぬ少女の姿が、映写機のように連続して楽間の頭の中を満たした、

だから、そのナイフが捕らえたのが睡蓮の左腕だったことを、楽間は理解することが出来なかった。

「え？」

疑問を浮かべる間も無い。

最速で振るわれたナイフは睡蓮の腕を紙のように断ち切り　そして、楽間に向けて差し出された睡蓮の右手から発せられた何かが、楽間を地面に叩きつけた。

一瞬。

受身など出来るわけも無い。その一瞬で勝負は決していた。

睡蓮に押し掛かれ地面に倒れた楽間の耳に、寸断された睡蓮の右腕が落ちる音が届いた。

「……腕一本より、俺の方が面白そうだったってこと？」

「うん、そういうこと」

左腕から鮮血を流しながら睡蓮は笑った。刀のように細められた右手は、地に伏す楽間の喉元に突きつけられている。

身動きすれば殺す。

殺されることは無いと理性で分かっている、楽間は動くことが出来なかった。

「はっ、ホント、面白いわお前」

「気に入ってもらえて何より」

楽間に手刀を突きつけながら、睡蓮は花のような笑みを浮かべた。そして立ち上がるうとして、フラフラと左右に揺れる。足元で血溜りがパシャリと音を奏でた。

「……で、悪いんだけど、肩貸してくれない？ 血が足りなくてフラフラするんだけど」

「いいぜ。ついでに止血もしてやるよ」

「……あ、それは大丈夫」

「んな訳無えだろ。明らか致死量になるぞ、これ」

楽間の半笑いの問いに、睡蓮はにっこりと笑った。

その腕からはいつの間にか血が止まっていた。

「これ、義手だから。一定以上血液が流れたら勝手にセーフティで止血されるようになってるから、平気」

腕を落とされて、楽間を地面に押し倒し、それでいて平然と笑い、あまつさえ生身と変わらない精巧さを誇る義手を付けた少女。

立花睡蓮。

そんな奴が今の今まで何食わぬ顔で同じクラスに居たかと思うと、楽間は吊り上っていく口元を抑えることはできなかった。

「……はあ、つくづく面白い女」

「言っただでしょ。私は魔女だって」

二人は死線の代わりに笑みを交わした。

人気の無い広場が僅かに明るくなる。空を見ればいつの間にか雲間から月が覗いていた。

そこから一筋の月光が祝福のように刺しこみ、二人を暖かく照らしていた。

次の日の昼下がり。青山蘇鉄は片手にビニール袋をぶら下げて、スーツ姿で歩いていった。

事務所のあるビルは相変わらず寂れていて、ふと視線を中心部へと向ければ、何倍も大きい高層ビルが立ち並んでいる町並みがある。それを見て、蘇鉄は一人溜息を長く吐いた。

スーツ姿を若干小さくしながら、蘇鉄はビルの中へと入る。彼が手に持っている袋の中身は八橋だ。約束通り二箱買ってきている。睡蓮とコーヒーを飲むことが、仕事帰りの蘇鉄の密かな楽しみだった。

しかしそんな彼の体も、事務所の扉越しに聞こえてきた男女の声を聴いた瞬間、彫像のように固まった。

「これが本物のコーヒーって飲み物。どう、あんな水増ししたファミレスのより百倍美味しいでしょ」

「んー、まあ認めなくも無い。て言うかお前が淹れた訳じゃないだろ。何でそんなに誇らしげなんだよ」

「何、楽間は豆から削らないと駄目なタイプ？」

「んなことは無いけどさ、ドリッパー？ ああいう機械製品に頼っていいのかってこと」

「いいじゃん、人間が知恵を絞って楽しんでコーヒー飲めるようになって開発された物なんだから。今使わないでいつ使うのさ」

蘇鉄は耐えかねたように扉を開いた。

昼間の目の眩むような陽光をバックに、二人の男女が顔を突き合わせるようにして話している。一人は同業者、立花睡蓮。これはいい。問題は相手側の、蘇鉄にとっては白黒写真でしか見たことの無い少年だった。

そして蘇鉄は思う。記憶に間違いが無いならば、件のジャック・ザ・リップパーでは無かるうか、と。

「……あのー」

蘇鉄はその光景に尻込みしたように、遠慮がちに声を発する。そ

の声に反応した睡蓮と目が合い、睡蓮は「しまった」というような表情に変わった。

「あ、……お帰りなさい」

「何だいその奇妙な間は。思ったより早く帰ってきたな、とかそういうことかい？」

「いや、あはは……」

睡蓮は目を逸らして頬を掻く。

「そして誰だいその男は。君はいつからこの事務所で男と一晚を明かすようになったんだい？」

「あ、この人、件のジャック・ザ・リッパー」

「……」

「どうも申し送れました。件の霧崎楽間です」

やはり、何故、という感情が入り混じり、何か言おうと思っただのだが、それすらどうでも良くなって、蘇鉄は心底だるそうに天を仰いだ。

「はあ……睡蓮君の左腕が無くなっているのはそういう訳か」

蘇鉄はとりあえず、自分の定位置である窓際のデスクへと腰掛ける。

そんな彼に向かって、二割くらい反省の色を滲ませた睡蓮が話しかけた。

「ごめんなさい。……で、悪いんだけど、また左腕作って」

「……きみ、報酬は八橋だと言っただろう」

「いや蘇鉄さん、一箱足りないよ？」

「何言ってるんだ、僕はちゃんと二箱買ってきたぞ」

そう言っただけで蘇鉄はビニール袋を突き出す。その中には約束どおり八橋が二つ入っていた。

それを知って尚、睡蓮は笑みを浮かべる。それはどこか邪悪さを孕んだ笑みだった。

「私と楽間の分でしょ？ ほら、やっぱり一箱足りない。私は二箱要求したつもりだったんだけど」

「……そんな無茶苦茶な」

そう来たか、と蘇鉄は全身の息を吐き出すようにぐったりした。それから睡蓮の傍らの楽間を見る。彼は相変わらずコーヒークップを傾けている。どうやら蘇鉄の分まで飲んでしまったらしい。しかし蘇鉄は「いや、それはもともと彼のための物なのかもしれない」と無理矢理にに自分を納得させ、それからニヤニヤと笑う睡蓮に向き直った。

「……まあ、君は良く働いてくれた。霧崎楽間が君の知人だったとは予想外だったが、それでも一晩で解決してくれるとは思っていなかった。スピード解決の報酬だと思えば、義手の一つや二つ、安いものだろう」

「やった」

睡蓮は小さくガッツポーズをする。

「……本当は八橋なんて霞むくらの費用が掛かるんだけどね。で、霧崎楽間君」

「何？」

つつけんどんに楽間は返答する。そこには友好的な態度など毛の先ほども見受けられない。

「君はこれからどうするつもりかな？」

「どうするって、それはそっちが決めることじゃないのかよ」

「僕が上から命じられたのはこの連続殺人事件の解決だけだ。方法までは指定されていない。だから、君が殺人を止めるなら僕としても君をどうこうするつもりは無い」

「……殺人を止める、ね」

楽間はぼんやりと天井を眺めた。目は虚ろで何も見ていない。何も映さない空虚な瞳だった。

「……正直、人を殺すことなんてどうでもいいんだ。本当に。俺はそこに楽しみを全く見出していなかったから。ただ単純に、自分が生きてる証が欲しかった。何らかの形で社会に噛んでるって実感できないと、気が狂いそうだったから」

自重するような楽間の言葉にムツとした表情になった睡蓮は、「気は狂ってたじゃん。明らかに」と言っつて、それに対して楽間は乾いた苦笑いを浮かべた。

「……かもな。どっちにしろ壊れるのは俺の宿命だったのかも、な」
壊れる、と彼は表現した。

無差別に人を攫い、そして殺す彼自身の在り方を。

しかし、睡蓮は思うのだ。自覚の在る狂気は壊れているわけではないと。

それはただ単に、自分の在り様を模索する、静かな抵抗の意思であると。

「ところで楽間君、家はあるかい？」

唐突に蘇鉄が質問する。楽間は一瞬目を瞬かせて言った。

「……無いよ。どうせそつちで調べが付いてるんだろう。俺の素性の大半がダミーだってこと」

「うん、ただの確認だよ」

蘇鉄は少し笑って、

「それで、君さえ良ければなんだけど、ここに暮らさないか？」

「……は？」

「僕もちょうど荒事に耐え得る助手が欲しかったところなんだ。睡蓮君は弟子とは言っても夜になれば帰っちゃうし、僕の仕事は夜がメインだからね」

「……ちよつと待て。アンタは殺人鬼を雇うような物好きだったのか」

「ああ、そんな設定もあったね」

蘇鉄は心底どうでも良さそうに言っつて　それから、人を切り裂いてバラバラにしそうなくらい鋭い視線を、楽間に向けて叩き付けた。

「安心してよ。君がどんなに頑張っても、僕を殺すなんてことはおるか、傷なんて付けられる筈もないから。僕にしてみれば、君もただの一高校生に過ぎないよ」

「……」

「それでも一応魔術師なんてことをやってるから、懐の広さは保障するよ」

「……あっそ」

諦めたのか、降参したのかは分からないが、楽間は確かに肯定の意を示した。

それからバツが悪そうな顔になって、無理矢理付け足すように言った。

「後悔すんなよ？ 俺は今からここに住み付くからな」

そう言ってから、これでは子供みたいだ、と楽間は顔を背けた。それを見て蘇鉄は先ほどとは打って変わって柔らかな表情になり、大仰に頷いた。

「結構。対価は僕のお手伝い。とは言っても毎日じゃないから安心してよ。それなりにリスキーだけど、屋根の下で三食付いているなら文句は無いだろう？」

「ありまくりだけど、まあいいよ。毎日空き家を探すのも面倒だったんだ」

「上々。君は今日から僕の住み込みアルバイト生だ」

蘇鉄は楽間に歩み寄り手を差し出した。楽間はそれを振り払うわけでもなく、ただ無視した。

友好の挨拶を断られた蘇鉄は一つ息を吐いて、自分の分のコーヒの準備に取り掛かった。

それを背に、楽間が睡蓮へポツリと零す。

「……お前は？」

「え？」

「お前はどっしてるんだ？ 家に帰るのは分かったが、毎日来るのか？ ここ」

「……毎日じゃないけど」

思い返すのは蘇鉄との日々の記憶。

それは悪くも無く良くも無く、敢えて言うなら殺風景な日々。

色の無い日常、でも、そこに新しい友人ができたと言っならば、思うところは在る。

「でも、毎日来るのもいいかもね」

「……そか」

呟くような睡蓮の返答に合わせるように、楽間も言葉少なに返事をする。

一瞬の静寂。室内を満たすのはコーヒーが静かにドリップする音だけだった。

それに耐えかねたように、楽間が大きく咳払いをして、それからニヤリと笑って言った。

「今度お前にナイフ教えてやるよ」

「いらない。気持ちだけ受け取っとく」

「そう言うなって。魔除けにもなるんだぜ？ 吸血鬼とかに会った時は、この銀のナイフが役に立つ」

「そんな夢物語は起こらないから安心して」

楽間は喉を震わせて笑った。

それは本当に楽しそうな少年の顔だった。

「お前は俺に殺され損なったし、俺はお前に更正され損なった。ま、成り損ない同士、仲良くしようや」

「お断り。私は損なつたなら、埋める努力をするから」

「それって、俺に殺される努力？」

「違ふよ。殺されないで、生きる努力」

そう言つて睡蓮は確認するように頷いた。楽間は「ははん」と笑った。

「なら俺は、精々非行に走るとしますかね」

「アンタは私が責任持つて真人間に直すから安心して」
近い将来。

確固とした意識も無く生きていた睡蓮は、楽間と繋がることで満たされるだろう。

人を殺すことでしか自分を認識できなかった楽間は、睡蓮と関わ

ることで満たされるだろう。

それはまるで月が満ちていくような光景。闇色だった空に花開くような銀色の光が現れる。

二人とも月だから、自分では輝けない。

そんな少年少女を後ろから照らすように、コーヒーの匂いが染み付いた太陽が、そっとその存在を照らすのだ。

願わくば、その光が跳ね返り、月光となって地表を照らしますように。

蘇鉄は小さく息を吐き、それからその香りを一杯に吸い込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3269o/>

月光

2011年4月29日18時26分発行